

山田美妙「いちご姫」の文中敬体（下）

— 都の花版から金港堂版への改稿の実態 —

山 県 浩*

目 次

1. はじめに
2. 調査対象
3. 考 察
 31. 全体的傾向
 32. 用法差及び内部差（以上、前号）
 33. 表現の実態
4. おわりに

33. 表現の実態

[1] 都の花版の文中敬体 161 例全体でも、また「言い切り・中止法」「～マシタガ」などの用法に限定しても、38 のまともりは、金港堂版への改稿のあり様によって二分される。

即ち、別表-1～3の如く、前半は、都の花版の文中敬体が金港堂版でそのまま維持される諸例と非敬体化される諸例に二分される。このとき、一般に文末が敬体であると、文中敬体が非敬体化されることが多い。しかし、後半は、

* 福岡大学人文学部教授

表-3の如く前半に比べて全般に文末が敬体であることが多いにも関わらず、文中敬体が維持され、非敬体化されることはない。

[11] 32章までは文末述語のあり様という言語的条件に注目して検討してきた。しかし、これは、一表現内の問題で、数量的に処理できるものである。

本章では、個々の用例につき、表現に即して検討し、文中敬体の非敬体化の詳細を示しつつ、文中敬体のあり方に関与する言語的条件として他にどのようなものがあるのかを明らかにする。例えば、文末が敬体であっても文中敬体が離れている、数行にわたる長大な表現に見られる場合、文中敬体は維持されやすかろう。また当該表現の前後の末尾が「マシタ」や「デシタ」で連続する場合は、文中敬体が維持されて文末が非敬体に改められることもあろう。従って、先の内部差も文末述語のあり様以外の言語的条件が前半または後半に偏っていたため生じた偶然の結果に過ぎないと言えるかもしれない。

そこで、本章では、「言い切り・中止法」「～マシタガ」に限定して、前半で文中敬体が維持された諸例と非敬体化された諸例、更に後半で文中敬体が維持された諸例、これら三種（それぞれ「中止法」は $\alpha 1$ 類・ $\alpha 2$ 類・ β 類、「～マシタガ」はA1類・A2類・B類と称する）を比較することを基本とする。

この場合、金港堂版での改稿に際し、表現単位での一般的な傾向とした《一表現一敬体化》、即ち、「一表現に文末を含め、複数の敬体が存する場合、第一に文中の敬体、それが難しい際は、自余の策として文末の敬体が非敬体化される」ことを基準にして、文中敬体の非敬体化に関して、文末が敬体か非敬体かという条件以外にどのような言語的条件が関与するかを明らかにすることを目標の一つとする。併せてこの過程で条件の現れ方に何らかの偏りが38のまともに存しないかなども検討する。ただ、内部差の意味するところは、文末表現での実態も踏まえ、続稿で最終的に取りまとめることとする。

[12] 本来ならば、本章での考察は、段階を経たもの、例えば、 $\alpha 1$ 類・ $\alpha 2$ 類・ β 類の諸例を順次検討して、各々の特徴を捉え、その上で $\alpha 1$ 類・ $\alpha 2$ 類の特

徴が**β類**にどのように見られるかなどを通して、文中敬体の非敬体化に関する言語的条件や内部差の意味するところを明らかにすべきである。

しかし、本稿は、文中敬体が金港堂版においてどのように改められたかを全体的に捉えることを目的とし、本章はその一部をなすものである。そこで、具体的には、前半で文中敬体が非敬体化された**α2類・A2類**の諸例を中心に検討して、捉えた特徴が後半で文中敬体が維持される**β類・B類**の諸例にどのように見られるかなど、即ち、**α1類・A1類**の諸例との比較は最低限に留めるなど、対象とする分類に軽重をつけて検討を行う。

[2] 都の花版・文中敬体の「言い切り・中止法」30例は、金港堂版で1例が削除されて対応しなくなるだけで、17例が敬体のまま維持され、12例が非敬体化される。更にこれらは、第26までと第27以降で二分され、非敬体化されるのは、第26までである。

これらの内訳として、文末の敬体・非敬体以外で数量化の可能な文中敬体の種類を併せて示す。即ち、前半の場合、次の如く、敬体が維持される**α1類**はデス系が多く、非敬体化される**α2類**はマス系が多い。

α類；第1～26・都の花文中敬体・中止法（全22例）

α1類・敬体維持（10例）；マス系=3、デス系=6、マセンデシタ系=1

α2類・非敬体化（12例）；マス系=8、デス系=2、マセンデシタ系=2

β類；第27～38・都の花文中敬体・中止法（全7例）

敬体維持（7例）；マス系=5、デス系=3

この場合、同じデス系でも**α1類**敬体維持の6例はすべて「デシタ」（除「マセンデシタ」）、**α2類**非敬体化の2例はともに終止形「デス」である。**β類**は、マス系が多いが、デス系はすべて「デシタ」である。丁寧さだけを表すマス系と異なり、デス系は繫辞として名詞述語などを構成するとともに丁寧さを表す。更にタ形であると、様々な意味・用法を抱えることになる。このため、別の非敬体の言い方に改めることが難しく、維持されるのであろう。^{注(12)}

なお、「中止法」は、言い切りの述語形式ながら、直後に白胡麻点・読点が施されているため、文中とする用法である（32章 [31] 項）。例えば、用例 [4] の如く「分ならず」という同一形式であっても、白胡麻点「。」が直後に来る都の花版は「文中」、句点「。」が直後に来る金港堂版は「文末」と認定される。

更に金港堂版では白胡麻点が原則的に用いられない。このため、都の花版と金港堂版の対照によって「いちご姫」の文体を捉えようとする場合、文末だけでなく、本稿の如く文中も対象とする必要がある。

[21] 都の花の「中止法」30例のうち、金港堂版と対応する29例は、敬体維持・非敬体化で二分されるものの、うち9例は、都の花版の白胡麻点・読点が金港堂版で句点に改められ、文末化する。

更にこれら9例は文末化に際して非敬体化される3例とそのまま敬体が維持される6例に二分される。

[211] 用例 [15] は、金港堂版で「思案が有り」の如く文末化と同時に非敬体化される1例で、同様の例は他に2例存する（α2類12例中の3例）。

[15] a ^{うるこ もと}窟子の許まで行／^いツて何うするつもりか、それもいさゝ^{しあん あ}か思案が有りました。が、その思案ハ^{しあん このときだいに}此時第二で、ほとんど心の中では^{こゝろ うち くわんぜん}完全の^{かたち な}形を為したやうで、そして^{と と}取り留めやうとすれば又^{また な}為さぬやうでした——すなはち、^{こと よ}事に因ツたら^{よしまさ のぞ}義政の望みを容れて——^{どくだん}獨断で——^{しようち}承知して、そして……その跡は^{あと もくてき さと くも やま}目的の郷が雲か山かとなツて^な居ました。／ 都・第6

[15] b ^{うるこ もと}窟子の許まで行ツて何うするつもりか、それもいさゝ^{しあん あ}か思案が有り。が、その思案ハ^{しあん このときだいに}此時第二で、ほとんど心の中では^{こゝろ うち くわんぜん}完全の^{かたち な}形を為したやうで、そして^{と と}取り留めやうとすれば又^{また な}為さぬやうでした——すなはち、^{こと よ}事に因ツたら^{よしまさ のぞ}義政の望みを容れて／——^{どくだん}獨断で——^{しようち}承知して、そして……その跡は^{あと もくてき さと くも やま}目的の郷が雲か山かとなツて^な居ました。／ 金・第6

本例は、一表現に文中敬体の2例見られる8表現の一つで、分類③とした対応である（31章 [36] 項）。都の花版で7行少々にわたり、長いことも二文化された一因であろう。ただ、「思案が有り」という非敬体文末は、口語体としても、また心中文でもないため、不自然である。

[212] 用例[16]は、白胡麻点・読点を句点に改めただけの文末化の一例で、敬体維持17例中6例の一つである（ $\alpha 1$ 類 = 4、 β 類 = 2）。

[16]a ^{もとへうろこまる} 元々 ^{ぶけ} 鱗丸が ^{ふけい} 武家の不敬を ^{おも} にく、^だ 思ひ出したのも ^{たぐいちじ} 唯一時の ^{こども} 小児ご、
 ろ、こゝに ^{りひ} 理非を ^い 言ふ程でも ^な 無い事 ^{こと} でした、が、その ^{こども} 小児ごゝろ、
 それは ^{ちが} 違った目 ^め 見てこそ ^{さうい} 左様言ふものゝ、その ^{こども} 小児に ^お 於て ^{こども} ハ小児 ^{こども} 心 ^ご が ^ご うたが ^ご ひも ^ご 無く ^ご 大人 ^ご の ^ご 大人 ^ご 心 ^ご でした、
^{だれ} 誰におさへられる事 ^{こと} も ^な 無く、
 また ^{まぎ} 紛らす物 ^{もの} も ^{ちやうど} 丁度無かつた、
 そのため（中略）^{よしまさ} 義政を ^{あんさつ} 暗殺 ^ご したら ^ご この ^ご 天下 ^ご の ^ご 不平均 ^ご は ^ご 救はれやうと ^ご 思ひ ^ご ころ ^ご やう ^ご になりました。

／ 都・第14

[16]b ^{もとへうろこまる} 元々 ^{ぶけ} 鱗丸が ^{ふけい} 武家の不敬を ^{おも} にく、^だ 思ひ出したのも ^{たぐいちじ} 唯一時の ^{こども} 小児ご、
 ろ、こゝに ^{りひ} 理非を ^い 言ふ程でも ^な 無い事 ^{こと} でした、が、その ^{こども} 小児ごゝろ、
 それは ^{ちが} 違った目 ^め 見てこそ ^{さうい} 左様言ふものゝ、その ^{こども} 小児に ^お 於て ^{こども} ハ小児 ^ご 心 ^ご が ^ご うたが ^ご ひも ^ご 無く ^ご 大人 ^ご の ^ご 大人 ^ご 心 ^ご でした、
^{だれ} 誰におさへられる事 ^{こと} も ^な 無く、
 また ^{まぎ} 紛らす物 ^{もの} も ^{ちやうど} 丁度無かつた、
 そのため（中略）^{よしまさ} 義政を ^{あんさつ} 暗殺 ^ご したら ^ご この ^ご 天下 ^ご の ^ご 不平均 ^ご は ^ご 救はれやうと ^ご 思ひ ^ご ころ ^ご やう ^ご になりました。／

金・第14

本例は、31章 [36] 項で分類④とした対応で、全体の敬体の用例数は変わらない。しかし、都の花版で10行に及び、文末も含めて一表現に3例の敬体を有するものが、文末も含めて一表現に2例の敬体を有するものと文末だけに敬体を有するものに二分される。

これら文末化された9例に共通する性格は、ほぼそのまま文末化されたことが物語るようにこれらの述語はいずれも内容的な切れ目で、ここで完結し、独

立性が高い。例えば、用例[16]の場合、文末化された「大人心でした」までは、筋子が鱗丸と言われていた子供の頃、武家方に抱いた憎しみの説明、その後は、その「奇怪な心」がどのようになったかの説明である。

[22] 前半・第1～26で文中敬体が非敬体化される **a2類** 12例のうち、3例が用例[15]の如く金港堂版で文末化される。

用例[15]以外の2例も心中文ではない。このため、用例[17]・[18]の如く文末化と同時に「寝ず」「屈しなかつた」と非敬体化されると、主語が「馬」「親」と明示してあるだけに情景描写文として不自然である。

[17]a と言ふのハ親ばかり。同じ流には飲みながら牛は寝ても馬は寝ません。なぜか、闇が姫の心にあつくなりました。目のはたらきは鈍くなつて～都・第2

[17]b と言ふのは親ばかり、同じ流には飲みながら牛は寝ても馬は寝ず。なぜか、闇が姫の心に深くなる、目のはたらきは鈍くなつて～金・第2

[18]a 親にもいちごハ屈しませんでした。しかし、それはいちごを愛する情の親にも有つたので親もいちごを強く壓さなかつたのです。都・第15

[18]b 親にもいちごハ屈しなかつた(。)しかし、それはいちごを愛する情の親にも有つたので親もいちごを強く壓さなかつたのです。金・第15

金港堂版で文末化される **a2類** の3例は、非敬体化される点はともかく、文末化されるだけあっていずれも述語の独立性は高い。

[221] 第1～26で文末が敬体である用例は、文中敬体が非敬体化される **a2類** で12例中9例、文中敬体が維持される **a1類** で10例中5例である。全体的な傾向と同じく、文末が敬体であると、金港堂版で文中敬体が非敬体化されやすい。

以下、**α2類**につき、文中敬体がそのまま文末化される先の3例を除く9例は、文末が敬体・非敬体である場合、それぞれどのような特徴を有するか検討する。

[222] 金港堂版で文中敬体为非敬体化される**α2類**で、文末が敬体である6例は、文末がそのまま敬体の場合（5例）と文末も非敬体化される場合（1例）に分かれる。

前者5例の場合、文中敬体の種類は、[2]項に示した全体相と同じく「マセン」(2)・「マシタ」(1)・「デス」(2)の如くマス系が目立つ。一方、敬体維持の**α1類**は3例で、「デシタ」(2・用例15・16)・「マセンデシタ」(1)の如くデス系のみ、それも「デシタ」に限られる。

α2類は、デス系でも両例とも終止形「デス」というル形である（用例19・20）。[2]項でも述べたように、意味・用法の身軽さのため、「デス」の方が「デシタ」より削除されやすいのであろう。

19a さて思へばよくへ^{しんてい}の心底、^{なか}中のものは誰^{たれ}あらう、やはり^{まぎ}紛れも無い^な窟子^{うろこ}ではあ^なつたのです。かきくど^{こと}言葉^ばの切^{せつ}、今^{いま}までになく^{むね}胸に浸^しました。 都・第23

19b さて思へばよくへ^{しんてい}の心底、^{なか}中のものは誰^{たれ}あらう、やはり^{まぎ}紛れも無い^な窟子^{うろこ}ではあ^なつたので、かきくど^{こと}言葉^ばの切^{せつ}なさ、今^{いま}までになく^{むね}胸に浸^しました。 金・第23

20a 終^{つひ}に今日^{こんにち}は境遇^{きやうくう}となりました。為^なつた、それで悟^{さと}れば猶^{なほ}よろしいです。が、一度^{いちど}藍^{あゐ}に落^おちた糸^{いと}はたやすく白^{しろ}にハ返^{かへ}らぬ比^{たと}へ、吐^はき出されか、つて^{かはぐち}八川口^{ふね}で船^とも止^とめられませんでした、實^{じつ}に止^とまりませんでした。／ 都・第26

20b 終^{つひ}に今日^{こんにち}は境遇^{きやうくう}となりました。為^なつた、それで悟^{さと}れば猶^{なほ}よろしい、が一度^{いちど}藍^{あゐ}に落^おちた糸^{いと}はたやすく白^{しろ}には返^{かへ}らぬ比^{たと}へ、吐^はき出されか、つては川口^{かはぐち}で船^{ふね}も止^とめられませんでした、實^{じつ}に止^とまりませんでした。

／ 金・第 26

用例²⁰a は、31 章 [36] 項で分類⑥とした対応で、都の花版では希少な、文末を含めて一表現三敬体の一例である。

両例とも文中敬体の述語は独立性が高く、「あつたのです」「よろしいです」で内容が完結し、ここを末尾としても問題ない。しかし、文末でも顕著であった終止形「デス」を削減する金港堂版での方針に従ってか、用例¹⁹では「ノデ」に改められ、用例²⁰では「デス」が削除される。^{注(13)}

なお、用例²⁰の「止められませんでした」「止まりませんでした」の繰り返しは、「反復前件」に類した表現で、修辭的な意図から改められなかったのであろう。

²¹a たゞ主人の顔容、それがもつとも人の目に立ちました。顔容と言つて外でも有りません、力味のある美しい出来でした。／ 都・第 1

²¹b たゞ主人の顔容、それがもつとも人の目に立ちました。顔容と言つて外でもなし、力味のある美しい出来でした。／ 金・第 1

用例²¹の如く「有りません」を「なし」とする例は、他に第 21 に 1 例見られる。用例¹⁹・²⁰と同じく文末が敬体で、短い表現だけに文中の非敬体化によって簡潔な表現になっている。但し、先の 2 例と異なり、本例は金港堂版の「なし」の如く、前件は後件を導くための前置きで、「有りません」「なし」と中止的に言いさして、後件で詳しく「顔容」を説明している。

その他、第 14 に「知れました」→「知れる」の例が見られる（用例³）。都の花版で 11 行に及ぶ一節で、「近づくまゝ数も知れました／知れる」は、直前の「眸をこらして居る内に」からの流れでは文末として言い切っているように見え、同時にその後の「総数五人ばかりの一むれでした」に連体節として繋がっているようにも解釈できる。但し、非敬体化された金港堂版は連体節に捉えられやすい。

a2 類には、用例²²の如く文中と同時に文末も非敬体化され、表現全体が

非敬体化される例が1例見られる。

22a ^{あふひのすけ} 葵典侍さへもがくの^やを休めてうつかりと^な為つていちごを^{みつ}見詰めて^ゐ居
ました。^{せきた}急立てるいちご、^{いまさらざふひやう}今更雑兵も^{ゆめ}夢に^{ゆめ}夢見るやう、^{つひ}終に^{あふひのすけ}葵典侍
を^{ゆる}ば赦すと^き決めました、^しが、^{そのかは}強ひていちごに^こ其代りに^{いひだ}来いとも^{いひだ}言出
せません。／ 都・第5

22b ^{あふひのすけ} 葵典侍さへもがくの^やを休めてうつかりと^な為つていちごを^{みつ}見詰めまし
た。^{せきた}急立てるいちご、^{いまさらざふひやう}今更雑兵も^{ゆめ}夢に^{ゆめ}夢、^{つひ}終に^{あふひのすけ}葵典侍を^{ゆる}ば赦すと^き
めて、さて、強ひていちごに其代りに来いとも言出せず。／ 金・
第5

「決める」「言い出す」とも雑兵の動作で、文中敬体が「決めて」と改められ、後件に繋ぐことは適切である。しかし、心中文でないため、末尾を「言出せず」とすることは問題である。このように金港堂版で情景描写文が完全に非敬体になることは、用例17・18も同様で、大島氏も第5・9の用例（大島（1984）14頁）で掲げられるところで、金港堂版での過剰な非敬体化の一例である。

[223] a2類で、文中敬体が文末化される3例を除く9例のうち、文末が非敬体である3例は、文末が非敬体でありながら、文中が非敬体化される。即ち、用例22と同じく金港堂版で一表現から敬体が完全に削除される。

23a ^{こせき} 戸籍がたしかであつて^{しよじ}諸事に^{とげ}届をしたものならば、^{じせい}時世を^く苦しめて^や病
で^{はつきやう}発狂した^{くげ}公卿は^{いくたり}幾人^{あり}ありましたらう、^さ笹の^は葉に^{むらさき}紫の^{はちまき}鉢巻とまでは
行かずとも ^ゆ三井寺の^み謡曲を^み實地に見せる^な姫も^な無くは^な無かつたとか。
／ 都・第1

23b ^{こせき} 戸籍がたしかであつて^{しよじ}諸事に^{とげ}届をしたものならば、^{じせい}時世を^く苦しめて^や病
で^{はつきやう}発狂した^{くげ}公卿は^{いくたり}幾人^あつたか、^さ笹の^は葉に^{むらさき}紫の^{はちまき}鉢巻とまでは^ゆ行かず
とも ^み三井寺の^み謡曲を^み實地に見せる^な姫も^な無くは^な無かつたとか。／ 金・
第1

24a ^あ 言ひ中てられるまで^{なげ}はまだ^{せき}嘆きも^{ちから}堰をやぶる^も力は^も持ちませんでし

た、が、應答の間に意味を荷つて、わが胸の思ふところまで刺され、ばまた迎へられていと、烈しく… / 都・第2

24b 言ひ中てられるまではまだ嘆きも堰をやぶる力は持たず、が應答の間に意味を荷つて、わが胸の思ふところまで刺され、ばまた迎へられていと、烈しく… / 金・第2

25a 見ると夏代はいちごを上目で見たばかりで差俯向いて居ました。まづ気にハ掛かりました、が、悟らぬ気色で、 / 「まゐりました。」 / 都・第4

25b 見ると夏代はいちごを上目で見たばかりで差俯向いて居ました。まづ気には掛かる、が悟らぬ気色で、 / 「まゐりました。」 / 金・第4

これら3例の文中敬体の述語は、独立性が低く、内容的に後件に繋がる。それだけに文中敬体が非敬体化されると、すっきりする。

用例23は、「ありましたらう」「あつたか」の如く挿入的に語り手の主観が表出されている。挿入句として独立性は低くないが、表現全体としては後件と対になって末尾で完結する。用例24・25は、用例22と同じく接続詞「が」で前件と後件が結び付けられる。「言い切り・中止法」ながら、本章[3]項で扱う「～マシタガ」と用法は同一で、独立性は高くない。このため、用例24は「持たず」と中止の形式に改められている。

これらの例は、文末が非敬体であるにも関わらず、文中敬体が非敬体に改められ、《一表現一敬体化》が更に推し進められている。但し、文末は「無かつたとか」「烈しく」「気色で」など、述語の省略された形式である。分類上は非敬体ながら、厳密には敬体・非敬体の二項対立から解放されている。美妙の意識は「言うことです」「なりました」「差し俯いていました」などの省略であろう。この点で用例22と事情が異なる。

[23] **β**類、即ち、第26～38の文中敬体7例は、金港堂版でそのまま維持され、非敬体化されることはない。

本項では前半で文中敬体が非敬体化される **α2** 類の特徴がこの諸例に見られないかを検討する。この場合、順序としては、前半で文中敬体が維持される **α1** 類の特徴を捉え、**β** 類での文中敬体維持につき、その意味を考えるべきである。しかし、本稿の目的から **α1** 類は注で一部の用例に基づいた特徴を述べるに留める。

[231] **β** 類 7 例のうち、文末が敬体であるのは 5 例で、うち 2 例は、用例 [26] の如く直後の白胡麻点が句点に改められ、敬体のまま文末化される（他 1 例の文末化は、用例 [53] 前半の「～マシタ、デ、～」の構文）。

本例は、**α2** 類の文中敬体が非敬体化されるだけの例（用例 [22]・[25] 等）と同じく、都の花版で「～マシタ、ガ、～」の構文で、内容的に後件に繋がる。「思ひました」の独立性は、特段高い訳ではない。しかし、文末化しない **α2** 類の両例は、文末が金港堂版で非敬体化したり（用例 [22]）、元々句末が非敬体であったりした（用例 [25]）。本例の都の花版・金港堂版とも「ありました」で敬体である。つまり、同じ構文ながら本例は二文化することによって《一表現一敬体化》を実現している。

[26] a はじめは途胸^{とむね}を突^つきました。三十六計^{けい}にぐるに如^しかず、逃亡^{たうぼう}しやう
とハ思^{おも}ひました。が、其足^{そのあし}を引^ひきとゞめるもの^ひが^ありました。都・
第 32

[26] b はじめは途胸^{とむね}を突^つきました。三十六計^{けい}にぐるに如^しかず、逃亡^{たうぼう}しやう
とは思^{おも}ひました。が、其足^{そのあし}を引^ひきとゞめるもの^ひが^ありました。金・
第 32

同じく文末が敬体である他 3 例は、金港堂版で表現が殆ど変更されず、文中敬体のまま引き継がれる。表現の長さは 2・3 行で、二つの敬体は隣接し、くどいとも感じられる。また前後の表現にも文中・文末に敬体が見られる。

[27] うかへ明^あくれば今^{こん}夜^やといふ其^{その}日^ひにもなりました。朝^{あさ}起きて眠^ねさう
な目^めをしてしづかに獨^{ひと}り椽^{えん}端^{はな}にすわつて外^{そと}をながめて居^ある夢^{ゆめ}王^{わう}の後^{うしろ}か

ら聲こゑをかけたのは小太夫こだいふでした。／ 都・第 31 【金港堂・ほぼ同一表現】^{注(14)}

28 身の素性すみすじやうを人に聞かれて大変たいへんといふ心持ちこゝろもちもしました。素生すじやう、たゞその老尼らうにがわが母ははと言ふいだけなら構かまひません。が、いちごと自分じぶんとが兄弟きやうだいであるなど、言ふ事いこと、それを人に聞かれて快ひとくもありません。／

都・第 36 【金港堂・ほぼ同一表現】

29 どうも何なんとも角かとも言へぬ心いこゝろもちでした、肩かたも張るやう、その肩かたを打つといくら強つよくてもいたくも有ありませんでした。母ははの事ことハ忘れたやうに為なりました。いつしか生まれ変かはつたやうな気きもしました。／たゞ

今のところ夢いまゆめとなつて腰こしを掛けた儘まになりました。／ 都・第 37 【金港堂・ほぼ同一表現】

用例27・29の「なりました」「心もちでした」は、いずれも独立性が高く、ここで内容的に完結性する。両例は、用例26と同じく句点で切り、後件は「そして」「つまり」などで立ち上げることが可能である。しかし、続けることによって、時間的な連続性、心情・感情の一体性を現そうとしたのであろう。

用例28は、接続詞「が」を介している分、用例27・29の述語に比べて「構いません」の独立性はやや低い。前件と後件は「老尼が母であるコト＝許容できる、自分といちごが兄妹であるコト＝許容できない」と対立的な内容ながら、ともに小二郎の心情であるため、一体化して描こうとしたのであろう。

用例29は、第 37 の末尾で、第 38・大団円においていちごが発狂する伏線となる描写である。短文で、文末を敬体タ形で連続させ、いちごのただならぬ様子を描く。このような文中・文末を問わない敬体の連続からは、くどさに基づく敬体・非敬体の選択が常に妥当であるとは言えない。

[232] 文中敬体の維持されるβ類7例のうち、文末非敬体の2例(用例30・31)は、α2類の用例23～25と同じく文末が特殊で、敬体・非敬体の二項対立の外にある。

30 もう見く短刀きらめ たんたう！／あはや、残念ざんねん、終つひに不意ふいでした、一太刀窟子ひとたちうろこは脇わき

ばら
腹に！ 都・第28 【金港堂・同一表現】

- 31 つひに小二郎ハ素気なく母を待遇する気になりました まこと、根
 からの不孝の心ハさら—無い身。それでいざ虐待しやうといふ場合
 ひの胸ぐるしさ。 都・第36 【金港堂・同一表現】

ただ、**a2類**の諸例と異なり、本2例は、切迫した場面で、感情が込められている。文中敬体の述語はともに独立性が高く、末尾とすることができる。二文化して、後件を独立させると、語り手や小二郎の感情の高まりがより簡潔・適切に伝えられる。しかし、二文化していないのは、用例27・29と同じような表現意図があつてのことであろう。

用例30は、窟子が樺有源太に襲われた場面で、思いや動きが断片化して投げ出されている。末尾の「脇腹に」は、「受けました」などの述語の省略か、「不意でした」を末尾とする、倒置法の変形かと考えられる。

用例31は、小二郎が実母であることを知りながら、老尼を追い出そうとする場面である。用例30の「不意でした」と同じく独立性が高く、「気になりました」を末尾とすることは可能である。しかし、白胡麻点で繋ぐのは、素気なく待遇するコトは結果的に虐待するコトであると説明し直し、結果的にそれは小二郎の「胸ぐるしさ」に「になりました」と一貫した内容として繋げ、完結させようとの考えのためであろう。

[24] 後半で文中敬体の「中止法」が維持される**β類**は、文末化された2例を含め、全体として内容的に完結する、独立性の高い述語を持つ諸例からなる。

しかし、金港堂版で文中敬体が維持されたのは、分割できる内容であるにもかかわらず、一つの表現として描くことによって生じる何らかの効果（時間的連続性・内容的一貫性や一体性など）をねらった結果であろう。

これに対して、前半で文中敬体が非敬体化される**a2類**には、**β類**と同じく独立性が高く、そこを末尾とすることの可能な例も見られた。しかし、それらの例は、文末化されていた。文中のまま非敬体化された残りの述語は、独立性

がやや低い、挿入句の末尾であったり、中止的に後件に繋がったりする諸例である。また終止形「デス」が文中に来る場合も該当する。

結局、本項での **α2 類** と **β 類** の比較では、**α2 類** に独立性の低い述語や終止形「デス」が存することが違いとなる。これは、これらの例が前半に存し、後半に存しないという用例の偏りでもある。しかし、別の言い方をすれば、金港堂版で非敬体化される特徴を持った **α2 類** の如き「中止法」の諸例が都の花版の後半に存在しない、即ち、そのような例が都の花版の第 27～38 に記されなくなったという執筆方針の変更のためとも言える。

なお、前半で文中敬体が維持される **α1 類** の諸例も **β 類** の諸例と同じく、文中ながら、当該述語を文末とするのが妥当な、独立性の高いものが目立つ。^{注(15)}
[3] 一種の修辞である「言い切り・中止法」に対して「～マシタガ」は通常の表現として形式・用法とも安定している。また対象とする用例は、すべて動詞述語のタ形で、均質である。

本 [3] 項では、金港堂版での改稿に際して前半・第 1～21 で「～マシタガ」が非敬体化されるとともに「～モノヽ」に改められる **A2 類** 19 例と同じく前半で「～マシタガ」が維持される **A1 類** 13 例を比較しながら、後半・第 22～38 で「～マシタガ」のままの **B 類** 17 例につき、**A2 類** の特徴がどのように見られるかを検討する。この過程で文中敬体「～マシタガ」の非敬体化に関与する言語的条件が存しないか、存すれば、どのようなものかを明らかにする。

[311] 別表-3【独自の「ものヽ」】の欄に記したように都の花版には元々からの「～モノヽ」の用例（用例 32 等）、金港堂版には、それを引き継いだり、都の花版の「～マシタガ」からでない、別の表現から改められたりした「～モノヽ」の用例（用例 33 b）が存する。

従って、金港堂版には、都の花版の「～マシタガ」から改められた「～モノヽ」を含め、三系統の「～モノヽ」が見られることになる。特に用例 32 などの「～マシタガ」と無関係な「～モノヽ」の例は、その意味・用法を広く捉える

ために今後検討が必要である。

なお、梅林（2015）（2016）の如く、逆接の接続表現には本稿で扱う諸形式以外に用例²⁶aなどの「～マシタ、ガ、～」などが存し、それらと本稿で扱う諸形式は無関係でない。しかし、これは逆接表現全体の問題となり、本稿の範囲を遥かに超える。このため、本項で扱うのは、「～マシタガ」とそれに対応する「～モノ、」の用例に限る。

[32] 實^{じつ}のところ^{もんどのすけ}主水助^{ふうふう}と夫婦^{にん}になつてからこのかた^{をとこ}二三^{じやうふ}人の男^をを情夫^ににしていちごも^{じやうよく}情慾^ににふけつたものの更^{さら}に其間^{そのあひだ}に一片^{いつぺん}も真^{まこと}の愛情^{あいじやう}といふものは無^なくてあつた^たのです。 都・第32【金港堂版・ほぼ同一表現】

[33]a 「さらば妾^{わらは}も帰^{かへ}りませう」。／とハ言^いツたま、流石^{さすが}に些^{すこし}ハ心細^{こころほそ}くもありました。／「窟子^{うろこ}どの、御身^{おんみ}ハ？」／ 都・第15

[33]b 「さらば妾^{わらは}も帰^{かへ}りませう」。／とは言^いツたもの、心細^{こころほそ}し、／「窟子^{うろこ}どの、御身^{おんみ}ハ？」／ 金・第15

[312] 都の花版の文末の敬体・非敬体（表-3）に加え、金港堂版の文末のあり様も併せて示すと、次の如くである。

「～マシタガ」の用例に限定しても、全体の場合と同じく、文末も含めて非敬体化される傾向が顕著である。しかし、前半と後半は対照的である。

A類・第1～21の文末（全32例）

A1類；～マシタガ→～マシタガ（13例）

都の花版—金港堂版

敬体—敬体=6 [マス—マス(4)・デス—デス(2)]

敬体—非敬体=2 [マス—φ(1)・マセンデシター—φ(1)]

非敬体—非敬体=5

A2類；～マシタガ→～モノ、（19例）

都の花版—金港堂版

敬体—敬体=11 [マス—マス(8)・デス—デス(1)・マス—デス(2)]

敬 体—非敬体 = 3 [マス— ϕ (3)]

非敬体—非敬体 = 5

B類・第 22～38 の文末；～マシタガ→～マシタガ（全 17 例）

都の花版—金港堂版

敬 体—敬 体 = 15 [マス—マス (10)・デス—デス (5)]

非敬体—非敬体 = 2

前半では程度の差こそあれ金港堂版で文中・文末とも敬体を削減する方向にある。この場合、**A2類**の如く都の花版で文末が敬体であると（19例中14例）、「～モノ、」に改められることが多いのは、全体の傾向と一致する。同時に金港堂版では、文末も非敬体化され、一表現に敬体なしが4割超となる。一方、**A1類**では文中敬体が維持されるものの、文末非敬体が元々少ないところ、金港堂版で文末が非敬体化されるため、金港堂版での文末非敬体の割合は**A2類**より高くなる（[金港堂版の文末敬体 対 非敬体] **A1類**：6例 対 7例、**A2類**：11例 対 8例）。

後半**B類**では、都の花版で文末が敬体であることが**A類**に対して多い（15例 対 2例）。しかし、「～マシタガ」は維持され、金港堂版で文末が非敬体化されることもない。

[313] 現代語の接続助詞「ガ」「モノ、」に関する研究は膨大で、すべてを踏まえて検討することは難しい。また美妙の時代の意味・用法が現代語と同一であるかなど、歴史的な検証も必要である。^{注(16)}

勿論、現代語の「ガ」「モノ、」の意味・用法に係る研究及びこれらの歴史的研究は、「いちご姫」の用例を検討する際、基準となる。しかし、本来は山田美妙「いちご姫」の文体の問題である。先賢によって示された意味・用法を参考にしつつ、美妙がどのように両者を捉え、両者を使い分けていたか、用例に基づいて検討することが肝要である。

なお、概略的に、記述研（2008）に従って両者の関係を述べると、「モノ、」

は逆接節に限られるものの、「ガ」は逆接節・等位節で、広く逆接・対比・譲歩・前置きの用法を有する。この用法の違いから前半第1～21で「～マシタガ」が維持される **A1 類**と「～モノ、」に改められる **A2 類**に二分されるのは、妥当である。

一方、代表的な研究で示される「モノ、」の意味・用法は、下記の如くである（下線は、山県による）。

- (a) 国立国語研究所（1951）；ある事がらの存在・成立を一応容認・譲歩し、それにもかかわらず別の事がらが存在・成立する事を主張しようという事態における前件・後件の接続。 220 頁
- (b) 佐竹（1984）；前件に述べた事柄の成立を一応認めた上で、後件でそれとは相反する、また対応しない事柄が展開するという関係を表すのに用いられる。前件と後件とを同じ重みで対比的に扱うのではなく、重点は後件にある。前件は後件に対して、一応これこれであるがと、保留・限定を付加的に提示するに過ぎない。 92 頁
- (c) 池上（1997）；前件の内容をプラス（マイナス）の評価を表すものとしてとらえ、それに対する後件の内容を反対にマイナス（プラス）の評価でとらえて、遺憾、消極的容認を表す 28 頁
- (d) 記述研（2008）；従属節に述べられた事実から期待される事態が起こらない、あるいは起こらなかったことを主節で述べる。 160 頁

注（16）の諸研究を併せると、接続助詞「モノ、」の特徴は、「ガ」との対比において、「限定」に加え、何らかの（+）（-）または（-）（+）の評価を下すこと、一応の消極的な容認・譲歩を表すこととまとめられる。

本項では、**A2 類**で「～マシタガ」から「～モノ、」に改められた諸例につき、現代語の意味・用法と照らしてその特徴を捉え、**B 類**の諸例に同一の特徴を有する例は存しないかを検討する。また前半で「～マシタガ」の維持される **A1 類**の諸例の中に「～モノ、」に置き換えられる「～マシタガ」が存しないかに

も言及する。

この場合、(a)～(d)の如き「モノヽ」の特徴を有するかの検討は、修辞性の高い、破格の多い「いちご姫」の文章を対象にする場合、難しいところがある。そこで、最低限のところ、都の花版の「～マシタガ」が逆接であるか、即ち、その後に「シカシ」が挿入できるか、田辺(2001)に倣って「～ニモカカワラズ」に置き換えられるかなどで検証する。その上で、「モノヽ」に固有な意味・用法が認められるかを確認する。

[32] 前半・第1～21は、「～マシタガ」が金港堂版で維持されるA1類13例とそれが「～モノヽ」に改められるA2類19例に二分される。

形式的な特徴で両者の違いに関わると考えられるのは、「～マシタガ、シカシ～」という構文の存在である。

即ち、A1類は当構文が13例中1例と限られるものの、A2類は19例中6例(用例[34]等)も存する。言うまでもなくA2類の6例はすべて「～モノヽ、シカシ～」に改められる。「シカシ」の存在から明らかなようにこれらの「ガ」は逆接を表す。

なお、「～マシタガ、シカシ～」 「～モノヽ、シカシ～」は、二葉亭四迷「浮雲」を調査した梅林(2016)が「近代小説としての新しさを持っていた」「斬新な表現形式」(同61頁)とする構文である。

[34]a ^{ごしよ まった な}御所は全く無^なくならず、^{のこ}残^{のこ}つては居^あましたが、^{のこ}しかし^{のこ}残^{のこ}つたといふ
だけ、なまじひに昔見^{むかし み}せがほの階^{きさばし}ハ白^{しら}髪^がの殿上^{でんじやうびと}人と諸^{もろ}ともによろほひ
果^はて、ほとん^みど障^{くさき}れば碎^{たいてい}けさう、御園^{みその}の草^{くさき}木^{たいてい}も大^{こども}抵^をは子^と供^とに折^とり取^とら
れて、それでも枯^かれ果^はてず^{なつ}に夏^{なつ}の新^{しん}芽^めを——誰^{だれ}に見^みせに——射^ふ
て居^あるさへも哀^{あは}れを呼^よぶ種^{たね}で^{した}。 都・第1

[34]b ^{ごしよ まった な}御處は全く無^なくならず、^{のこ}残^{のこ}つては居^あたものヽ、^{のこ}しかし^{のこ}残^{のこ}つたといふ
だけ、なまじひに昔見^{むかし み}せがほの階^{きさばし}ハ白^{しら}髪^がの殿上^{でんじやうびと}人と諸^{もろ}ともによろほひ
果^はて、ほとん^みど障^{くさき}れば碎^{たいてい}けさう、御園^{みその}の草^{くさき}木^{たいてい}も大^{こども}抵^をは子^と供^とに折^とり取^とら

れて、それでも枯れ果てずに夏の新芽を——誰に見せに——射い
て居るさへも哀れを呼ぶ種でした。 金・第1

用例[34]は、公家方の衰退に伴い、御所が荒れ放題であることを説明する一節である。御所が完全になくなってはいないという前件に対して、後件では昔の面影はなく荒れ果てているとその状態を限定し、「哀れ」と評価している。

[35]a 衣紋を繕つて僅に小褌をきり、と引いて、待掛けましたが、併しそれ
れは早まつた用意、簾から透かせば客は綱手に案内されて奥の書院へ
通りました。 都・第4

[35]b 衣紋を繕つて僅に小褌をきり、と引いて、待掛けたもの、併しそれ
れは早まつた用意、簾から透かせば客は綱手に案内されて奥の書院/
へ通りました。 金・第4

用例[35]は、いちごの屋敷を訪ねた窟子は自分に対面するつもりであろうと
考え、いちごが身嗜みを整え、待っていたところ、その思惑が外れ、自分で
なく父母と対面するため書院に向かった。このため、いちごが身嗜みを整えたの
は、結果的に期待外れの「早まつた用意」であったと述べられる。

[36]a 兎に角、それならそれで窟子に直々面會して、充分に尋ねた上で
無くては分からぬ事、この思案はさすがに付きかけましたが、しかし
猶また邪魔する言葉をまた主水助が言ひました。 / 都・第20

[36]b 兎に角、それならそれで窟子に直々面會して、充分に尋ね/た上
で無くては分からぬ事、この思案はさすがに付きかけたもの、しか
し猶また邪魔する言葉をまた主水助が言ひました。 / 金・第20

用例[36]は、主水助から窟子の話を聞かされ、どうするかの対応を思い付いた
にも関わらず、意外にもそれを覆すような話を主水助が持ち出した場面であ
る。いちごの定まりかけた決心が揺らぐ。

なお、A1類に見られる1例の当構文は、「ガ」は逆接でなく、A2類の諸例
と異なる例外的なものである。^{注(17)}

[321]「シカシ」を後接しないで「～マシタガ」が逆接を表す例は、A2類に少くない。

用例[37]は、主水助の誘いに応じる決心をしたいちごが「時服」に着替え、主水助の待つ茶室に入ってから場面である。四方山話が続くと思っていたところ、予想しなかった窟子話題を主水助が切り出す。「話し」の内容はまだ不明ながら、先取りする形で「あら、飛んでも無い」と意外性が示される。

[37]a ^{いつぶく} 一服の茶も ^{ちや} 済んで、やがて ^よ 四 ^も 方山 ^{ものがた} の物語りが ^{はじ} 始まりましたが、^{はな} 話しは、あら、^な 飛んでも ^{こと} 無い事に ^{うつ} 移りま／した。／ 都・第 20

[37]b ^{いつぶく} 一服の茶も ^{ちや} 済んで、やがて ^よ 四 ^も 方山 ^{ものがた} の物語りが ^{はじ} 始まったもの、^{はな} 話しは、あら、^な 飛んでも ^{こと} 無い！／ 金・第 20

用例[38]は、いちごが閉じこめられていた砦から鎧姿のまま脱出し、行き会った僧に連れられて屋敷に帰ろうとする場面である。鎧姿をしているため、すれ違う武士に咎められたり、怪しまれたりするかもしれないと不安に思っていた。しかし、そのような事態は起こらなかったという文脈である。前件はマイナス評価、後件はプラス評価で対比される。

[38]a それから ^{ひとむ} 一群れ、^{ふたむ} 二群れ、^{みち} 道で ^{ほか} 他の ^{ぶし} 武士どもに ^あ ハ ^あ 遇りましたが、いづれも ^{こなた} 此方を ^み じろ／^み 見るばかり、^{とが} 咎め ^も し ^せ ません。 都・第 17

[38]b それから ^{ひとむ} 一群れ、^{ふたむ} 二群れ、^{みち} 道で ^{ほか} 他の ^{ぶし} 武士どもには ^あ 遇 ^つ ったもの、いづれも ^{こなた} 此方を ^み じろ／^み 見るばかり、^{とが} 咎め ^も せず、(中略) ^{かぶと} 兜を ^{ひろ} ひろ ^{つて} 顔 ^{かほ} を ^{ふか} さへ ^{かく} 深く ^{ほど} 匿 ^{つひ} した ^(ママ) こと、^あ つゆ ^も 程 ^も 終 ^に に ^あ や ^し ま ^れ ん ^で した。／ 金・第 17

用例[39]は、人声がするので、いちごが近寄ると、女性を拉致しようとする雑兵を見つけた場面である。前件は、その身なりが武家方らしく「具足」を身に付けているとしながら、後件は、具足のうち「並の鎧」だけで、兜などは身に付いていないなど、前件に対する限定がなされる。

[39]a ^{ぐそくがけ} 具足掛では ^あ 有 ^り ましたが、^{たぶん} 多分は ^{さふひやう} 雑兵、^{なみ} 並の ^{よろひ} 鎧 ^き を ^ぬ 着 ^て 居 ^る ^{やうす} 様子。

都・第5

[39]b 具足掛^{ぐそくがけ}では有^あつたもの^{もの}の、多分^{たぶん}は雑兵^{ざふひやう}、並^{なみ}の鎧^{よろひ}を着^きて居^ゐる様子^{やうす}。

金・第5

[322] A2類の「～マシタガ」で、「～モノ、」への置き換えが不自然であるものは、現時点で用例[40]の1例を確認している。

[40]a しふねく纏^{まつ}はられて終^{つひ}にいなミかねて仕込^{しこ}みの物^{もの}を貸^かしましたが、さていちごの方^{ほう}は今中々^{いまなかへ}の熱心^{ねつしん}、抜き^ぬはなしてためつ透^{すか}しつ、焼刃^{やきば}の匂^{にお}ひに見惚^{みほ}れて居^ゐました。／ 都・第12

[40]b しふねく纏^{まつ}はられて終^{つひ}にいなみかねて仕込^{しこ}みの物^{もの}を貸^かしたものの、さていちごの方^{ほう}は今中々^{いまなかへ}の熱心^{ねつしん}、抜き^ぬはなしてためつ透^{すか}しつ、焼刃^{やきば}の匂^{にお}ひに見惚^{みほ}れて居^ゐました。／ 金・第12

いちごの強い希望によって、窟子が刃のある太刀を貸したところ、いちごがためつすがめつその刀身を眺めている場面である。都の花版の前件と後件は、“～を貸したところ、それから・その後いちごは～”と時間を追って展開する。従って、「貸したニモカカワラズ」と置き換えることはできない。記述研(2008)によると、この「ガ」は後件に対する前置きを表している。もし「～モノ、」で展開するなら、“当初の強い希望に反して、いちごはすぐにその太刀を鞘に収めた、窟子に返した”などとなるはずである。

[33] 第1～21の前半は、「～マシタガ」が金港堂版で「～モノ、」に改められるA2類19例と「～マシタガ」が維持されるA1類13例と二分される。

A1類で「～マシタガ」が維持される、即ち、「～モノ、」に置き換えられないのは、「ガ」が逆接を表さないためではない。

[331] A2類に一定数見られ、その特徴となった「～マシタガ、シカシ～」の構文は、A1類には1例しか確認できない(注(17)参照)。

一方、A2類で「～モノ、」に改められるものの、逆接を表さない「～マシタガ、サテ～」の構文(用例[40])はA1類の都の花版に4例見られる。

「～マシタガ」の維持される A1 類の特徴と言えそうな構文であるが、用例は二分される。逆接で後件に繋がる例は、用例41の他 1 例である。^{注(18)}

本例は、元々気の強いいちごながら、朝に比べると、今は心が弱くなっているため、訪ねてきた窟子に言おうと思っていた言葉が出てこない場面である。元から勝ち気であるという前件に対して、そのときは…と限定して、弱気になって言いたいことが言えないと後件に逆接的に繋がる。この「サテ」は、用例40・Qと同じく【それから・その後】などの意味合いである。「利かぬ気でハ有ったものの～」と改めても自然な文脈である。

41 其處へ偶然めかしていちごハ廉をかゝげて出ました。／が、心ハ朝の時より充分よわく為つて居ました。利かぬ気でハ有りましたが、さてつひ言葉がまごつきました、たゞ頭のみすこし低れて。／ 都・第4
【金港堂版・ほぼ同一表現】

一方、当構文で逆接に解釈できない例は、同じく 2 例見られる。

用例42は、いちごが心を寄せる窟子に対して幼なじみの小君がより積極的に関わっていることを知り、小君が帰る後ろ姿をいちごが意外な思いで見送る場面である。「(小君ガ) 暇を告げて去ったニモカカワラズ」とすると、「後ろ蔭」にも「(小君ガ) ねらふとは！」にも繋がらない。表現として「去りました」で切って、後件はいちごの心中文として独立した感動文とする方が自然である。

42 でも気にもせぬ躰、快活にわらつて終に暇を告げて去りましたが、
さてその後ろ蔭——あれが窟子をねらふとは！／ 都・第3 【金港堂
版・ほぼ同一表現】

用例43は、いちごが鎧一式を身に付ける途中で退室した窟子がその後も部屋に戻ってこなかった場面である。前件の座敷を出たことと後件の戻ってこなかったことは逆接で結び付けられる事態ではない。普通なら“座敷を出たまま、再び姿を見せなかった”と続こう。「サテ」は「不思議」と一体化して挿入

句の心中文になって意外性を表している。用例⁴²と同じく感動詞である。

⁴³a ^きは ^{おもむ} ^{ごんじやう} ^{ことば} ^の ^こ ^{うろこ} ^{ざし} ^で
 着終つた趣きを言上すると言葉を残して窟子は座敷きを出ました
 が、^{ふしぎ} ^て ^な ^{もの} ^す ^で ^お ^{おほ} ^そ ^こ ^ま ^つ ^て ^あ
 着て不思議、手馴れぬ者が既に佩び終つて其處で待つて居ても
 窟子は更うろこにふたさら、び影かげも見みせませんでした。／ 都・第 12

⁴³b ^きは ^(ママ) ^{おもむ} ^{ごんじやう} ^{ことば} ^の ^こ ^{うろこ} ^{ざし} ^で
 着終たつ趣きを言上すると言葉を残して窟子は座敷きを出ました
 が、^{ふしぎ} ^て ^な ^{もの} ^す ^で ^お ^{おほ} ^そ ^こ ^ま ^つ ^て ^あ
 着て不思議、手馴れぬ者が既に佩び終つて其處で待つて居ても
 窟子は更うろこにふたさら、び影かげも見みせず……………／ 金・第 12

現時点では「～マシタガ、サテ～」の構文が「～マシタガ、シカシ～」の構文と同じく「ガ」が逆接であるか否かに関係するものかどうか確証を得ていない。今後、非敬体の「～ガ、サテ～」の構文も検討する必要がある。そこで、以下「～マシタガ、シカシ～」とともに除外して検討を行う。

[332] 「～マシタガ、サテ～」4例と「～マシタガ、シカシ～」1例を除く A1 類 8例のうち、「ガ」が逆接でない、即ち、「～ニモカカワラズ」に置き換えられないものは、3例確認できる。

⁴⁴ ^{ひと} ^し ^{あん} ^を ^わ ^す ^れ ^て ^あ ^ま ^し ^た ^が、^み ^を ^か ^へ ^り ^み ^れ ^ば ^う ^ろ ^こ ^と ^す ^こ ^し ^へ ^だ
 が一思案、わすれて居ましたが、身をかへりみれば窟子とすこし
 つて居ました。 都・第 8 【金港堂版・同一表現】

用例⁴⁴は、いちごが窟子と二人きりで燈の消えた部屋にいる場面で、「身をかへりみれば～」以下の如く部屋が真っ暗であるために忘れていた座り方、即ち、距離を置いて座っていたことを今思い出したという内容である。忘れていた内容が後件に置かれ、対応する述語が前件になる、一種の倒置である。

⁴⁵ ^お ^ほ ^{うち} ^の ^く ^げ ^な ^が ^し ^お ^と ^し ^こ ^し ^せ ^い ^と ^い ^ふ ^た ^め ^お ^も ^て ^だ ^た ^さ ^れ ^ず、^つ ^ひ ^ひ ^と
 大内の公卿何某の落とし子、私生といふため表立たされず、終に人
 になつた、それからそれへ移り移つて果てハ七歳の頃から禅寺の行童
 となりましたが、^う ^ま ^れ ^つ ^い ^て ^だ ^れ ^に ^に ^た ^か ^き ^し ^や ^う
 生れ付いて誰に似たか氣象のするどさ、その身の本
 心しん、自身じしんの素生すじやうハ全まく知らぬものゝ、^ど ^こ ^り ^ぎ ^{かん} ^が ^あ ^し ^か ^が
 何處やら理義を考へて足利をに
 くむ心こころが有ありました。 都・第 14 【金港堂版・同一表現】

用例⁴⁵の前件は、窟子が生まれてから「行童」になるまでの経緯、後件は、

窟子の心のあり様で、公家方ゆえ自然と足利＝武家方を憎む心があったという説明である。両者は逆接で結び付く内容ではない。

46 ^{たいか}戦ひの^す済んだ^{あと}跡ハなる^{ほど}程こんな^{もの}物かといち^{はじめ}ごも始めてつく〜知り
ましたが、それにしてもこの物^{もの}すごい^{てい}躰を見てハ^{なに}何か心も／ちも^{ころ}わる
くなりました。／ 都・第19 【金港堂版・同一表現】

用例46も同様に、無残な死体が放置された戦場にいちごが行き会わせた場面で、いちごの認識や心情が順を追って述べられている。用例45「為りました」と同じく「知りました」で切って、二文にする方がすっきりと分かりやすい表現である。二文化していないのは、いちごの心のあり様を一体化して描こうとしたためであろう。これらの「ガ」は、いずれも前置きである。

[333] A1類にも「～マシタガ」が逆接を表し、「～モノヽ」に置き換えることが可能なものは、用例47～49の如く5例存する（他は、第19の1例）。

47 ^で出たらバ^{おほかた}大方まづ^{うろこ}窟子から^{れい}禮をして^{ことば}言葉を掛ける^かだらうといち^{かんが}ごハ
^あ考へて^{かんが}居ましたが、^{その}其^{よきつ}豫察ハ^{ちが}違つて^{あひて}相手ハ^{こちら}じろりと^み此方を見たらばかり
——^{こゑ}聲も^だ出さず……／ 都・第4 【金港堂版・ほぼ同一表現】

本例は、窟子がいちごの屋敷を辞す際、自分に声を掛けるだろうといちごが期待していたところ、言葉を掛けずに退出しようとした場面である。後件に「豫察ハ違つて」など、いちごの予想が外れ、事態に対するマイナスの評価を下していることが知られる。

用例48の(イ)(ロ)2種の「～マシタガ」はいずれも後に「シカシ」を置いたり、「～かかった・来たニモカカワラズ」と置き換えたりすると、文意が明確になる。いちごは、閉じこめられた部屋から逃げ出す手がかりを得たものの、置き去りにする幼なじみの小君が気になり、更に彼女から声を掛けられて、一瞬心苦しさを覚えながらも、なにくわぬ顔でその場を収めようとする。

48 ^{まど}窓へ(イ)手^てはかゝりましたが、さすが^き気にかゝるのハ^{せうくん}小君の^{こと}事^でし
た。ふりかへる^け気はいい、^み見とめ^え得たか、^{こゑ}しわがれた^{こゑ}聲。——／「いづ

くへ御出で？」／ハツと胸へハ(口)来ましたが抜からぬ顔、——「今、」
 しかし心ハ上下顛倒、「助けうずる、そのため。しづかにへ。」／

都・第17 【金港堂版・ほぼ同一表現】

用例49は、正体を明かさぬまま、囚われているいちごに着替えを主水助が差し入れた場面である。いちごは鎧から「時服」に着替えたと自分が女であることが知られると心配し、それはとてもできないと前件の事態を後件で否定している。「～モノ、」に置き換えても問題ない。

49a 時服を一領さへ添へて来ましたがそれを着るなどハ無論出来ぬこと。それにつけても假り屋ずまひの陣中で猶時服ぐらゐハ始終あたらしいのが間にあふ驕奢と見るま、大内の衰顔も思ひ出されました。

／ 都・第20

49b 時服を一領さへ添へて来ましたがそれを着るなどは無論出来ぬこと。それにつけても假り屋ずまひの陣中で猶時服ぐらゐハ始終あたらしいのが間にあふ驕奢と見るま、大内の衰顔も思ひ出されました。／

金・第20

[334] 都の花版の「～マシタガ」が金港堂版で維持される A1 類にも「ガ」が逆接で、「モノ、」の意味・用法を持つ例が複数存することを確認した。

このように意味・用法が同一の例があるのに、A1 類では「～マシタガ」が金港堂版で維持され、A2 類では「～モノ、」に改められる。当然の如く文中敬体の非敬体化に関わる言語的条件は何かという疑問が生じる。

「～マシタガ、シカシ～」 「～マシタガ、サテ～」という構文を除き、逆接を表す A2 類の諸例と A1 類の用例47～49を比較すると、次の如く文末が敬体であるか非敬体であるかの違いが見られる。即ち、A1 類は、[312] 項でも触れたように金港堂版では A2 類に比べて文末が非敬体であることが若干多い。

1. A1 類で該当する5例の内訳は、都の花版で文末敬体は1例（用例48

(イ)、文末非敬体は3例（用例47・48(ロ)の他、第19の「～迫りか、

りましたが、(中略)飛びかゝりもせず、/)ながら、金港堂版で非敬体に改められることもある(用例49b)。

2. **A2類**の、当該2構文の7例を除く12例の内訳は、都の花版で文末敬体は8例、文末非敬体は4例、金港堂版でこの文末敬体8例のうち2例が非敬体化される。

A1類で金港堂版においても一表現二敬体となる、例外的な用例48(イ)は、短文中に文中と文末二つの敬体が連続する。文中「かゝりましたが」に対する文末「小君の事でした。」は、後期敬体小説で好まれ、また注(12)の用例Kの如き体言止め「小君の事。」に金港堂版でどうして改められなかったのか、不思議である。しかし、用例の如くその後非敬体の文末「しわがれた聲」「抜からぬ顔」「上下顛倒」が続く。また当該の「窓へ～」の文の直前は、「(太刀ヲ)後ろへまはして背負ツたがよかろう。」という、都の花版でほぼ1頁、28行にわたるいちごの心中が綴られた最後の一文である。このため、(イ)の文中敬体も含め、「小君の事でした。」の如く敬体に留めておかないと、情景描写文に戻ったことが分からないと判断されたのではなかろうか。

本例を除くと、**A1類**で「～モノ、」に改められうる意味・用法を持ちながら、「～マシタガ」が金港堂版で維持されるのは、文末が非敬体であるためのようである。

[34] 都の花の後半・第22～38には、「～マシタガ」が17例存する。これらは、先に**B類**としたように、文末の敬体・非敬体に関わらず、他の表現に改められることなく、すべて「～マシタガ」のまま金港堂版に引き継がれる。

これは、一つに前半・第1～21で「～モノ、」に置き換えられた「～マシタガ、シカシ～」の構文が**B類**に一切見られない、即ち、用例の偏りに原因する一面もある。勿論、都の花版を執筆する中でこのような「斬新な表現形式」(梅林(2016)61頁)を後半に至って避けたことには、別の問題がある。^{注(19)}

しかし、前半で「シカシ」のない場合でも「～モノ、」に置き換えられた例

はA2類に少なくなかった。このため、後半で「～マシタガ」が「～モノ、」に置き換えられない原因として、この範囲に「～マシタガ、シカシ～」の構文が存しないことは、数例の範囲で関係する、二次的・三次的なものに留まる。

また前半で今後の検討が必要とした「～マシタガ、サテ～」の構文は、1例（用例55）で、本例は逆接ではない。

前半と同じく、都の花版の「～マシタガ」が逆接を表すかなどを基準にして検討すると、後半の「～マシタガ」で「～モノ、」に改めたい例は、数例に留まる。

[341] 後半・第22～38に見られる「～マシタガ」につき、第1～21での置き換え例に従うと、「～モノ、」に改められる逆接の例は、少なくない。

用例50（用例4の再掲）は、主水助がいちごと所帯を持った後、諍いから家を飛び出したいちごを求めて探し回っている場面である。前件で心当たりを「尋ねた」ものの、一向にいちごの所在が分からない。ここに「シカシ」を挿入したり、「尋ねたニモカカワラズ」と改めたりすると、前件と後件の関係はより明確になる。また尋ね回ること期待される、いちごの所在の発見が実際は叶わなかったという主水助の期待外れも読み取れる。

50a もし^{ひるまみ}晝間見たなら^{おほかたち}大方血まなこ。其處^{そこ}此處^{ここ}となく^{たづ}尋ねましたが、さらに^わ分からず。分^わからぬまゝ、いつかつか^な名の知れぬ^し人里^{ひとさと}の無い^な焼^やけ野^のに^の来^きか、つて^き聞^きけば、さア^{たいへん}大変、女^{をんな}の泣^なき聲^{こゑ}が^{こゑ}しました、しかもくるしむ^{こゑ}聲。／ 都・第26

50b もし^{ひるまみ}晝間見たなら^{おほかたち}大方血まなこ。其處^{そこ}此處^{ここ}となく^{たづ}尋ねましたが、さらに^わ分からず。分^わからぬまゝ、いつかつか^な名の知れぬ^し人里^{ひとさと}の無い^な焼^やけ野^のに^き来^きか、つて^き聞^きけば、～ 金・第26

用例51・52も同様で、いちごの要望に主水助が対応しない、殿＝與謝小二郎からの要請をいちごが拒むなど、前件で求められる事態は、後件で依頼相手によって拒否され、成立しない。用例53は、いちごが隣の部屋の様子を窺お

うとするものの、聞くだけでは満足できず、襖を開けて目で確かめようとして
いる。これらはすべて「～ニモカカワラズ」に置き換えることができる。

51 それでひそかに時々は主水にもそれとなく追ッて、どうぞ窟子を無
い物にしてくれろとかき口説いた事も有りましたが、兎角主水は應ぜ
ず、其内に主水を殺すやうにもなりました。／為ッて後日を経て思ひ
入れれば入る程気にかゝりました。 都・第 28 【金港堂版・同一表現】

52 狭蓬がまづ禮をしなければ自分も答禮を為まいかとまでに思ひ上が
りました。で、顔を見合ッても異に澄ます気になりました。／夜更け
て殿は狭蓬の方へ亘ッて、つれへゆゑ双六でも為やうから、いちご
に來いと使をよこす事も有りましたが、狭蓬の部屋へ行く事と言へば
一も二も無くいちごは拒みました、「病気でおりやれば。」／ 都・第
34 【金港堂版・ほぼ同一表現 なお、「～マシタガ」に関わらないが、「～思ひ上が
りました」で、～」が「～思ひ上がりました。で、～」となる文末化の異同が存する】

53 や、近寄ッた一間の横、襖の蔭に身をひそめて、さて聞いては見ま
したが、そればかりでハ満足が出来ず、やをら襖へソツと手を掛けて
浮かせて敷居をすこし這らせました。／のぞいて見れば、でも無残、
如何にも紛はぬ母でした。 都・第 35 【金港堂版・同一表現】

用例50を除くと、末尾はすべて敬体である。例外となる用例50の都の花版
も、末尾は非敬体「くるしむ聲」ながら、その直前に「泣き聲がしました」と
いう「中止法」が存する。即ち、都の花版の4例すべて一表現二敬体である。
また一部しか示していないが、前後の表現には文中・文末に敬体が見られ、敬
体が表現を超えて連続する。

[342] A1 類同様に「～モノ、」への置き換えが難しい、「ガ」が逆接でない例
がB類にも若干見られる。

用例54は、いちごが敵襲に乗じて砦から抜け出し、嵯峨野に落ちて、或る
農家に世話になっている場面で、留守番の娘から話を聞いているときのことで

ある。「～モノ、」に改めると、いろいろ地理につき聞いたものの、自分の屋敷までの道順は分からないままであったと繋がるはずである。しかし、実際は簞子らしき人物が近所に住んでいることを聞いたと、別の内容が後件になっている。当然「聞き合わせもしたニモカカワラズ」に改めることはできない。

54 ^{これ}是から早く家へ帰る工夫も付けたく、そのために地理をいろ／＼^き聞き合^あわせもしましたが、その間また不^{あひだ}図^{はからずみ}耳^とに止^とまつた事^{こと}を^き聞^ききまし^たた。／ 都・第22【金港堂版・ほぼ同一表現】

用例55は、第22～38で唯一の「～マシタガ、サテ～」の構文である。本文は、「近寄ったニモカカワラズ」に置き換えられない。内容的には、いちごが部屋に「近寄った」時点は、尼がその部屋を出たかなり後であることを表している。「ガ」は前置きを表し、「サテ」は感動詞的に【それはそうと・実際のところは】などの意味合いで、話題を転じる形で後件の時間的位置を説明する。

55 たまらなく^な為^はつて母はどうかと隙^{すき}見^みをしたく、やがて^{そつ}窃^しと忍^{しの}んで母の入れられた一間に^い近^{ひとま}よりました^{ちか}／たが、さて^{このとき}此^{まへ}時^{あま}ハ前に尼が死^しなうと^{かくご}覚^{きは}悟^{このへ}を極^やめて其^た部屋^いを立^いち出^いたその^{よほどのち}餘^よ程^{ほど}後^ちで^{した}。／ 都・第37【金港堂版・同一表現】

最後の用例54（用例Bの再掲）は、省略が過ぎて、判断が難しい。主水助が家出したいちごと間違い、いちごの知り合いの葬典侍を助ける場面である。主水助の問い掛けに対して官方＝公家方であると答えたところ、急に泣き出すという展開である。前件「答える」と後件「涙を催す＝泣き出す」は、逆接で結び付く事態でない。後件は「なかなか」以外は何も言わなかった＝泣いただけという含意なのかもしれない。そうであれば、「答えたニモカカワラズ」への置き換えるも可能かもしれない。しかし、その後に「口惜しい」と言い、泣き出した原因としていちごが関わっていることが示される。全般に言葉足らずの表現であるが、「ガ」は逆接でなく、前置きと捉える方が妥当である。

56 「さらば御^{おん}身^みは官^{みやがた}方^たで？」／「なか／＼」。／とは答^{こた}へ^なましたが、何

故^ぜか^{にはか}俄にもよほす^{なみだ}涙。／「これは御泣^{おな}きやる？」／「くツ……くツち
をしうおりやる。いちご……いちごが仇^{あだ}で、かたきで。」／ 都・第 26
【金港堂版・同一表現】

[35] **B類**は、後半・第 22～38 の「～マシタガ」すべてが金港堂版でそのまま引き継がれる諸例からなる。しかし、「ガ」が逆接で、**A2類**の諸例に照らして「～モノヽ」に置き換えることの可能な例は少なくない。

既述の「～マシタガ、シカシ～」の構文が存しないこと以外に非敬体化を妨げる**B類**固有の条件があるのかも知れない。

なお、前半・第 1～21 では意味・用法が同一であるのに金港堂版で「～マシタガ」が維持される**A1類**と「～モノヽ」に改められる**A2類**の比較によって文末が敬体か非敬体かという言語的条件が関与していることを示した。

B類は、都の花版で文末が敬体であることが**A類**に対して多く（15例 対 2例 cf. **A1類**：8例 対 5例、**A2類**：14例 対 5例）、また金港堂版で文末が非敬体化されることさえない。従って、**B類**は都の花版・金港堂版とも文末が敬体であることが他の二類に比して圧倒的に多い。

この場合、同じく「～マシタガ」が金港堂版で維持される**A1類**は、文末が非敬体で「～マシタガ」の部分だけが敬体、または金港堂版で文末が非敬体化されるなど、《一表現一敬体化》が進んでいた。このため、金港堂版で「～マシタガ」を殊更「～モノヽ」に改める必要性はなかったのであろう。**A2類**は、**B類**ほどではないが、都の花版で文末が敬体であることが多く、金港堂版では「～マシタガ」が「～モノヽ」に改められ、更に文末敬体も非敬体化され、《一表現一敬体化》が更に進んでいた。

しかし、**B類**は、文中が「～マシタガ」で、先の如く文末も敬体であることが多い、即ち、文末述語のあり様という言語的条件に従えば、**A類**以上に《一表現一敬体化》を進めるべき環境にある。にもかかわらず、**B類**は文中も文末もそのまま敬体が金港堂版で維持されていた。また挙例の 4 例のうち、用例

50 bを除くと、他3例は、短い表現内に敬体が隣接し、その前後の表現にも文中・文末に敬体が存する。

以上、金港堂版で「～マシタガ」が同じく維持されるとは言え、**A1類**と**B類**では事情が異なる。この場合、**B類**では文末が敬体か非敬体かは文中敬体のあり方に関与していないと言える。

4. おわりに

[1] 本論文は、山田美妙の後期敬体言文一致小説である「いちご姫」が単行本として刊行された金港堂版において初出の都の花版からどのように改稿されたかを全体的に捉えようとするものである。

言文一致に関する研究は、一般に文中でなく文末述語のあり様を対象とする。しかし、本稿では、文中の敬体表現がどのように改められたかを考察した。これは、「いちご姫」には敬体が文中に見られ、文体的な特徴となっていること以外に、補助符号のあり様が都の花版と金港堂版で異なること、倒置法などを除くと、通常なら文末に現れる言い切りの述語形式が文中に多いことなど、本作品では文中と文末が截然と区別しがたく連続的であるためである。

準備中の続稿では敬体だけでなく非敬体を含めたすべての文末のあり様を明らかにする予定である。そこでは、本稿と併せ、美妙が金港堂版「いちご姫」で最終的に目指した敬体の言文一致体はどのような文章であるかを示す。

[2] 都の花版の文中敬体（マス系・デス系・マセンデシタ系）の実態で特徴的な点は、次の①～④の如くである。

- ① 都の花版で対象とする表現 2445 のうち、文中に1例でも敬体を有する表現は 153 (6.3%) で、一表現に複数の敬体が存することがあるため、文中敬体の総数は 161 例となる。
- ② 3種の敬体は、マス系 128 例 (79.5%) が圧倒的で、デス系 21 例 (13.0%)・マセンデシタ系 12 例 (7.5%) と続く。

③ 文中に敬体が存しても2例までで、表現単位では〔敬体、敬体。〕79例(51.6)%・〔敬体、非敬体。〕66例(43.1%)の如く文中敬体が1例の組み合わせが圧倒的で、他は〔敬体、敬体、敬体。〕5例(3.3%)・〔敬体、敬体、非敬体。〕3例(2.0%)程度である。また文末も含めて一表現に複数の敬体を持つ表現は、87例(56.9%)を占める。

④ 文中敬体の用法は、「言い切り」と従属節の構成に限られ、前者は、表現の末尾に現れる、言い切りの述語形式を取る場合で84例、後者は「ガ」節・「カラ」節を構成する場合で77例である。

④の「言い切り」は、「中止法」「倒置」「反復前件」「注釈」の四用法からなる。ただ、「中止法」「倒置」で68例(81.0%)を占め、従属節も「ガ」節で75例(97.4%)を占めるなど、特定の用法に偏る。

続稿の内容に関わるが、都の花版で文末が敬体である表現は全体に対して約五割に留まる。更に文中敬体の存する表現は全体の一割に満たない。文中敬体は、「いちご姫」全編を通すと、極めて限られた表現である。

美妙の初期敬体小説四作品を調査した小野氏の報告によると、これらでの敬体の割合は、文末で80%以上、文中で「およそ20%前後を上下する」(小野(2004)177頁)である。初期四作品最後の「蝴蝶」は、「いちご姫」の連載が始まる年の1月に発表されたものである。半年後の『都の花』での連載に際して美妙は文中・文末とも敬体の使用を相当に絞り込んだことになる。

その他、④の従属節の敬体は、同じ初期四作品を調査した藤田(2014)で、「ガ」節に偏ることは同一ながら、様々な節で敬体が見られると報告される。量だけでなく文中敬体の用法でも絞り込まれている。

[21] 金港堂版でどのように文中敬体が改められるかは、大島(1983)(1984)や山県(2018)の文末敬体の改稿のあり様からある程度察せられるところで、文末に比したとき、減少の程度がどのくらいか、どのような形式への集約であるかなど、具体相が問題となる。

量的には、都の花版の文中敬体が金港堂版で文末化されたり、削除されたりした例も存するが、文中敬体として維持されたものは、88 表現（57.5%）・95 例（66.9%）である。

このとき、三種の敬体別では、母数が多いこともあり、マス系での減少が著しく、文中で引き継がれたものは、72 例（56.3%）である。また用法は三分の二程度の種類に削減され、特に「～マシタガ」から「～モノ、」への変更もあり、金港堂版では言い切りの「マシタ」「デシタ」「マセンデシタ」が過半数を占めるなど、「敬体+タ」の形式に集約される。^{注(20)}

金港堂版では文中に複数の敬体を持つ表現が減少し、[敬体、非敬体。] 49 例（55.7%）の他は、[敬体、敬体。] 38 例（43.2%）・[敬体、敬体、非敬体。] 1 例（1.1%）で、文末も含めて一表現に複数の敬体を持つ表現は、87 例（56.9%）から 38 例（44.3%）と減ずる。

[22] 改稿に際して文中敬体が減少するところ、金港堂版において文中敬体が非敬体化されるのはどのようなときか、維持されるのはどのようなときかが問題となる。

従来の指摘に従い、文末述語のあり様、即ち、[敬体、敬体。][敬体、敬体、敬体。]の如く文末が敬体である場合と[敬体、非敬体。][敬体、敬体、非敬体。]の如く文末が非敬体である場合を比較すると、都の花版の文中敬体は、前者、文末が敬体であるとその約 40%が金港堂版で非敬体に改められるのに対して、後者、文末が非敬体であるとその約 20%が改められるに留まる。更に金港堂版において、文中は敬体が維持されて文末だけが非敬体化されたり、文中・文末とも非敬体化されたりすることも少数見られる。

例外は存するものの、改稿に際して文末述語のあり様が文中敬体をどのようにするかを決定する重要な言語的条件の一つであることは明らかである。その他、文中敬体がそのまま文末化され、表現を二つに分割することによって、一表現内の敬体を減ずる例も見られる。

以上の如き改稿のあり様から《一表現一敬体化》という一般的な傾向が存するとまとめた。

[23] 文中敬体の非敬体化に文末述語のあり様が関与する点で、確かにこれは重要な言語的条件の一つである。しかし、金港堂版には〔敬体、敬体。〕が38例も残存する。このため、文中敬体のあり方に関与する、これ以外の条件は存しないのか、存すれば、どのようなものかなど、疑問が残る。

文末述語のあり様は、文中・文末という同一表現内で敬体が隣接する際に感じられる「くどさ」に関わることである。従って、更に前後の表現、ある段落・頁・章全体において敬体が文中・文末問わずどのように現れるかも検討する必要がある。本稿でも一部の検討では用例を長めに記し、前後の表現の文中・文末に敬体がどのように見られるかを示した。

ただ、不十分な検討に留まったが、一部の表現の連なりに「～マシタ」「～デシタ」の繰り返しが少ないから見えられ、場合によっては隣接する敬体述語どうしが脚韻をなし、リズム感を醸しているようなこともあった。即ち、本稿で「言い切り・反復前件」と称する用法以外に修辭的な表現性を意図した例が存する訳で、隣接ゆえの「くどさ」ですべてを説明することはできない。

[3] 金港堂版での改稿に当たって、「いちご姫」の38のまとまりが均質でなく、その方針が前半と後半で異なることは、大島(1983)(1984)で指摘されていた。

都の花版の文中敬体161例に関しては、別表-1の如く、第1～26と第27～38で異なり、第27以降文中敬体は一切改められず、都の花版の表現がそのまま金港堂版に引き継がれる。これは、正確な言い方をすると、都の花版の文中敬体そのまま文末化されることは第27以降にも見られるものの、「デス」「マス」「マセンデシタ」などを削除したり、他の表現を改めたりすることはないとなる。実際、《一表現一敬体化》に外れる〔敬体、敬体。〕〔敬体、敬体、非敬体。〕の如き組み合わせは第27以降に偏る。

従って、文末述語のあり様という言葉的条件もほぼ第26以前の前半の諸例

に見られるものである。すると、第 27 以降に非敬体化例が見られないのは、この条件に関わる用例が存しないためだけかとも考えられる。

そこで、非敬体化の割合がともに約 40%と高い「言い切り・中止法」と「ガ」節（～マシタガ）に限定して用例を検討した。その結果、問題となる三種の分類で共通する点・異なる点をまとめると、次の如くである。

- (1) 言い切り・中止法；後半の諸例は、前半で同じく文中敬体が維持される諸例と同様に該当述語の独立性が高い点で共通する。しかし、前半で非敬体化される諸例は、該当述語の独立性がそれほど高くない点でこれらと異なる。
- (2) 「ガ」節（～マシタガ）；後半の諸例は、前半で同じく文中敬体の維持される諸例と同様に「ガ」が逆接で、「～モノ、」に置き換えることが可能な例が一定数存することで共通する。但し、前半で文中敬体の維持される諸例は、都の花版・金港堂版の前者または両方で文末が非敬体であることが多く、前半で非敬体化される諸例は、都の花版・金港堂版の前者または両方で文末が敬体であることが多い点で異なる。

その他、特定の用法や構文の問題で、「中止法」においては終止形「デス」が金港堂版で非敬体化されやすく、「ガ」節においては「～マシタガ、シカシ～」という構文が金港堂版で非敬体化され、「～モノ、」に置き換えられやすい。これらの事象は、前半に特徴的なことである。同様の偏りは、(1) の独立性の高くない述語でも見られた。

このような内部差は、非敬体化される特徴を持つ例が前半に集中したためとも考えられる。しかし、(2) の如く、前半では、文末述語のあり様が文中の敬体・非敬体に関与するものの、後半では、前半で非敬体化される諸例より文末が敬体であることが多く、前後の表現にも敬体が見られるなど、前半であれば、文中敬体が非敬体化される条件にありながら、金港堂版では敬体「～マシタガ」が維持され、「～モノ、」に改められないことがない。

更に注(19)に示した「新奇な形式」や「中止法・反復前件」の現れ方を併せると、用例の偏りは表面的な問題である。金港堂版での改稿も関わるが、根本には、都の花版の執筆途中、後半から別の文体を志向するようになったこと、更に金港堂版での改稿に際しても、後半に至っては文末述語のあり様という言語的条件に基づいて《一表現一敬体化》を進めることを中止し、前半なら当然非敬体化される文中敬体の諸例をそのまま維持させたことなど、方針の変更があったためと考えられる。

33章の目的は、文中敬体のあり方に関与する言語的条件として文末述語のあり様以外にどのようなものがあるのかを明らかにすることであった。確かに、前半では、この文末述語のあり様が広く関与することを再確認し、更に個別の用法・構文レベルでの言語的条件を示した。しかし、後半では金港堂版において文中敬体が維持され、非敬体化されないことに関与する言語的条件は、本稿の限りでは見出せなかった。

[4] 大島氏は、「変化箇所は前半に集中」、この場合「〔都の花版の〕後半の文章に統一して、〔金港堂版の〕前半の文章が直されている」(〔 〕内、山県補足)と述べた後、「単行本の文章は、文中の「でした」「ました」は削除され、「ましたが」等の逆接は必ずといってよいほど「～ものの」にとってかわられ、文末の「ました」「でした」は減らすといった、かなり意識的で規則的な手の入れ方がみられる」(以上、大島(1984)13頁)と金港堂版での改稿方針をまとめられた。

ただ、一方で「助動詞を減らすこの方針は、『いちご姫』が連載されている間にも強化される傾向がみられ、終盤に向かうにつれて徹底されてゆく」(同13頁)の如く都の花版での文体変化にも触れられる。しかし、都の花版・金港堂版それぞれにどのような問題が存するのか、分明に区別・整理はしていない。

今後「いちご姫」の文体を論ずる際は、ほぼ一年にわたる『都の花』での連

載の途中で美妙はどのように文体を一貫させ、変化させたか、また連載終了後の約二年間美妙はどのような文体を目指して、金港堂版に向け、どのように書き改めたかなどを考えねばならない。この際、文中・文末の敬体がどのように非敬体化されたか、維持されたかだけでなく、例えば、注(10)の用例Ⅰ等の如き内容の変更を伴う書き直しを含めて考察する必要がある。この点につき、続稿でどの程度まで踏み込めるか分からないが、文末表現を幅広く扱う中でこの問題の解決の糸口をつかみたい。

最後に、敬体小説である「いちご姫」の文体を今後研究する際、考慮すべき、本稿で尽くせなかった問題点2点を記し、稿を閉じる。

1. 単に「マス」「デス」「マセンデシタ」の接続しない述語を一律に非敬体として扱った。しかし、その内実は様々である。論中示した諸例から明らかな如く、「いちご姫」の場合、「走った」などだけが非敬体ではない。省略・倒置など、内訳別に検討する必要がある。
2. 大島氏も例を示され、本稿でも金港堂版での過剰な非敬体化と称した、《一表現一敬体化》の行き過ぎとなる、情景描写文で文中・文末とも敬体が削除される諸例の扱いである。美妙が何か意図したことは間違いない。当該表現だけでなく、前後の表現の連なりからも捉える必要がある。

◇参考文献・引用文献 [本稿（下）で言及したもののみ記した。]

- 池上素子（1997）「『のに』・『ながら』・『ものの』・『けれども』の使い分けについて」『北海道大学留学センター紀要』1
- 梅林博人（2015）「明治における接続詞「しかし」の用法について」『日本語史の研究と資料』明治書院
- （2016）「『浮雲』の逆接の接続助詞と併用される「しかし」——位相、表現内容からの考察一」『相模国文』44

- 大島瑞穂 (1983) 「山田美妙研究—小説文体の変遷—」『国文』59
—— (1984) 「山田美妙研究—『いちご姫』から常体文体へ—」『東京学芸大学附属
高等学校研究紀要』21
- 小野正弘 (2004) 「デス・マス体の文章—山田美妙—」『国語論究 第11集・言文一致
運動』明治書院
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』秀英出版
- 佐竹久仁子 (1984) 「～もので／～ものの／～ものを」『日本語学』3-10
- 田辺和子 (2001) 「接続助詞「ものの」の文法化に伴う譲歩的意味の創出について」『日
本女子大学紀要 文学部』50
- 丹羽哲也 (1998) 「逆接を表す接続助詞の諸相」『大阪市立大学文学部紀要人文研究』50
- 角田三枝 (2011) 「モノノとナイマデモ：節接続の五つのレベルにおける逆接と譲歩条件」
『国立国語研究所論集』2
- 中里理子 (1997) 「逆接確定条件の接続助詞 —ガ・ノニ・モノノ・テモ・ナガラにつ
いて—」『言語文化と日本語教育』13
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- 藤田保幸 (2014) 「森鷗外訳「新浦島」の文章について —デス・マス体をめぐって—」『龍
谷大学国際センター研究年報』23
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 山県 浩 (2018) 「山田美妙「いちご姫」敬体文末の特徴」『福岡大学日本語日本文学』
27

注

(12) 都の花版の全体的なあり様で示した通り、デス系は全21例で、非敬体化されるのは、僅か4例(19.0%)である(31章[32]項；cf. マス系の非敬体化51例・39.8%)。これらの非敬体化例のうち、2例は「言い切り・中止法」(用例19・20)、2例は「言い切り・倒置」である。後者は、金港堂版で「デシタ」が削除され、体言止めとなる場合(用例K)、表現自体が削除され、対応しなくなる場合である。

- [K] a ^{かゝ} 屈んで草の^{くさ}茎の間から^{あひだ}向ふを^{むか}覗くと、^{のぞ}果たして^は人^{ひと}でした、二三人^{にん}。 都・第5
- [K] b ^{かゝ} 屈んで草の^{くさ}茎の間から^{あひだ}向ふを^{むか}覗くと、^{のぞ}果たして^は人^{ひと}、二三人^{にん}。 金・第5

(13) 前稿では、文末のデス系における金港堂版での対応につき、次の如くまとめた（山県（2018）421章）。

- (イ) 終止形「デス」は都の花版で55例のところ、金港堂版で5例が対応せず、6例が文中化される。残りの、文末で対応する44例のうち、終止形「デス」のまま対応するのは26例、その他、敬体は「デシタ」6例、「マシタ」1例と対応する。
- (ロ) 他の言い方は、都の花版で「デシタ」238例、「マセンデシタ」50例、「デシヤウカ」4例、「デシヤウ」4例、「デシタラウ」3例、「デスカ」1例である。金港堂版では、「デシタ」220例、「マセンデシタ」39例、「デシヤウカ」1例と対応する。

デス系全体の減少、デス系内での終止形「デス」の激減・「デシタ」への集約が顕著である。従って、文中で終止形「デス」と「デシタ」の扱いが異なるのは、文末でのあり方と並行的である。

但し、注(1)で述べたように都の花版の白胡麻点の扱い方を変更したため、続稿では、総数は変わらないが、文末・文中それぞれの用例数が異なる。

(14) 用例²⁷は、厳密には都の花版の文中敬体「なりました」後の白胡麻点が金港堂版で読点に改められている。

その他、「くやし^くりませんでした」と「くやし^がりませんでした」などの濁点の有無、「～ませぬ。」が「～ませ。」などの明らかな誤記、「ハ」と「は」の違いなども、本稿の内容に関わらない。しかし、完全に同一の本文でないため、【ほぼ同一表現】と注記し、【同一表現】と区別する。ただ、いずれの場合も対応する金港堂版の用例は示さない。

(15) α1類10例でそのまま文末化される4例を除く6例につき、略述する。

用例^Lの末尾「香を運ぶ」は、「靡く」と同じく情景描写で、本来なら敬体が妥当である。ただ、表現的には文中敬体「靡いて居ました」が文末である。ダーシ以下は、「吹き込む風」の追加説明として添えられもので、一種の「言い切り・注釈」と言える。

^L 几帳^{きちやう}の絹^{きぬ}も手垢^{てあか}ばかり。(中略) 椽^{えん}から吹き込む風^{かぜ}に懶^{ものう}さうに靡^{なび}いて居^ゐました
——吹き込む風^{かぜ}、血腥^{ちなまぐさ}い香^かを運^{はこ}ぶ。／その書院^{しよゐん}で刀^{かたな}の鞘卷^{さやまき}をして居^ゐる二人^{ふたり}の男^{なん}
女^{にょ}が有^ありました。／ 都・第2【金港堂・同一表現】

用例^M・^Nは、末尾がいちご・主水助の心中文と化しているため、文末は非敬体である。それ故、情景描写文として「近よりました」は、「燈火に」との倒置であるため、「燈火に」の後、「(敵襲に対応するため、主水助は鎧を求めたものの、従者は胴だけを) 投

げ掛けたばかりでした」は、これに続く「御免と言った」以下の主語は主水助であるため、「ばかりでした」の後に句点を施して言い切るのが妥当である。しかし、二文化されていないのは、前者は、「燈火」に対するいちごの心情と一体化させたり、後者は、緊迫した場面で連続する動作群として描こうとしたりしたためであろう。

【M】 そして出放題の、他にわからぬやうに眩いたが二言、三言、やがてまた近よりました、燈火に——燈火、こればかりハ近づきにく、もないッ。／ 都・第8 【金港堂・同一表現】

【N】 a 胴を投げ掛けたばかりでした、御免と言つただけをいちごへの挨拶として飛び出して、直ひとまづ立ち帰る気、軍の様子を見に出れば、これはいかに。敵ハ既に陣幕を斫りやぶつて（中略）見たことも無い不覚を取りました。／ 都・第21

【N】 b 胴を投げ掛けたばかりでした、御免と言つただけをいちごへの挨拶として飛び出して、直ひとまづ立ち帰る気。軍の様子を見に出れば、これはいかに 敵ハ既に陣幕を斫りやぶつて（中略）見たことも無い不覚を取りました。／ 金・第21

【O】 思ひ切つて心中の心中を言へば、（中略）深く心に其實くやしがりませんでした、むしろ僥倖で齟齬に逢つたのが切めての念晴らしのやうでした。ことに相手が盗人と明かしたのみならず、（中略）と明らかに言つたのが気に入りました。 都・第25 【金港堂・ほぼ同一表現】

用例【O】は文中敬体と文末敬体が隣接し、「～でした」の繰り返しであるため、くどさを感じられる。内容的には、いちごの心のあり様として、前件で否定的な捉え方を示し、後件で本質的な捉え方を示している。対比的な内容で、「むしろ」の存在からも、「くやしがりませんでした」を末尾にしても問題がない。しかし、「中止法」が維持されたのは、「むしろ」で対比・対照される並列的な内容ゆえに一体化して描こうとの考えに加え、「反復前件」に類した、同一表現内での「～デシタ」の繰り返しに修辭的な意図があったのであろう。

もう1例は、用例【15】の後段で、都の花版・金港堂版とも文中「為さぬやうでした」、文末「なつて居ました」である。他の諸例と同じく「為さぬやうでした」の独立性は高く、一つ内容が終わり、「すなわち」以下で「思案」を説明し直している。ダーシ後の内容は、曖昧な前件を具体的に言い直したものであるため、切らずに続けられたのであろう。

第1～26は、文中敬体の「中止法」が金港堂版で敬体のまま維持される諸例（**α1類**）と非敬体化される諸例（**α2類**）に二分される。以上の如き**α1類**の特徴から、両分類は、終止形「デス」を除くと、「中止法」ながら内容的に完結し、述語の独立性が高いと敬体が維持され、低いと非敬体化されるという傾向の違いに対応している。

(16) 接続助詞「モノヽ」の歴史は、田辺（2001）が詳しい。「源氏物語」とその現代語訳の対照を中心に江戸時代・現代の用法を記述する。その上で「ものの」は、平安時代に、「対比」表現として使用されていたが、徐々にその譲歩的意味を高めて行き、現代語では、受け手の予想・推測を前提とした譲歩的用法と変化した。この意味的变化に伴って、動詞接続が増え、その中でも「た形」接続の出現は、「ものの」による二つの事柄の共起を前提として譲歩表現を可能にした」（同112頁）とまとめ、「いくつかある譲歩表現のなかで、「ものの」が持っている固有の意味合いというのは、その保留的措置、つまり、「ひとまずこの事柄は棚上げにしておいて」という同時併存・反面随伴性である。…前件の内容が、まだ、完了した出来事として了解されているのではなく、付帯的狀況として述べられている」（同110頁）と現代語の用法をまとめる。

現代語の「ガ」「モノヽ」に関する研究は、逆接に限定し、これらを含む、複数の接続助詞の中で比較検討するものが多い。

中里（1997）は、「ガ・ノニ・モノノ・テモ・ナガラ」について、これらの用法の違いを捉えようとする研究である。この場合、条件付け・対比（対立）・対比（並列）・補足・順当な展開の否定・従属度の6点からこれらの異同を明らかにする。しかし、「ガ」と「モノノ」はともに従属度が「低」、他5点は「○」となり、扱う指標の限りでは違いが見られない。即ち、枠組みをなす根幹的な指標では違いの見出しがたい、類似した用法であることが分かる。

丹波（1998）は、「が（含、けれども）」を軸にして「のに」「とはいえ」「にもかかわらず」「ても」「ながら」「ものの」を取り上げ、それぞれの特徴を述べる。これらは3分類され、「が」は自由対立型、「ものの」は程度量型で、異なる分類とする。ただ、程度量型は、自由対立型の下位分類で、この関係は、角田（2011）の如く「モノヽ」は「逆接の意味の下位分類の一つである限定」（同132頁）を表すことと重なる。

(17) 都の花版で「～マシタガ、シカシ～」の構文を取りながら、金港堂版で「～モノヽ、シカシ～」の構文に改められない**A1類**の1例は、用例Pである。

都の花版で10行半に及ぶ長文の冒頭で、「ガ」節に対応する後件の事態が何であるか

捉えがたい（用例③の再掲）。

〔P〕^と ^{かく} 兎に角それぞれいちごとつれだつていちごを^{おく}送つて^み居ましたが、^{ふじん}しかし婦人の^{こと}事として^{さら}道^は更にはかどらず、^はかどらぬと^い言つて^よ夜更けに^{せん}婦人を^{ひとり}一人で^て手^ばなす^{わけ}譯にも^ゆ行かず、^{たゞ}それだけ、^{さき}囊に^{さきやう}左京に^うたが^はれた^{こと}事も^な無く^なハ^な無かつた^{もの}物の、^{ほか}それより外に^{しかた}仕方^はなく、^ほ（また^いちごを^憎くも^思はず）^や焼^け瓦^をが^らめ^かして^{みち}途^{ひろ}を^{ひろ}拾^うつて^{うち}行く^{うち}内に ～ 都・第14 【金港堂版・同一表現】

末尾は、いちごを迎えに来たと偽る野武士の一行に行き会い、「総数五人ばかりの一むれでした。」と締められる。「～マシタガ」の後、「しかし」以下の後件はいちごを屋敷まで送る道中の様子や窟子の心理などが描かれる。これは、前件の屋敷まで送るコトに逆接で繋がらない。この「ガ」は前置きで、「シカシ」は、森田（1984）の“それにして…”“それはそうとして…”といった気分を表すだけで、論理的な逆接条件を表していない（同509頁）という前代的な意味・用法である。

(18) 用例④1の他、用例〔Q〕も当構文で、「～マシタガ」は逆接で繋がる。

即ち、茶室に向向くようにという小二郎からの誘いの使いがいちごの元に再度来た際、「今まらうと思ひます。しばらく御前よろしく…」という言い訳をした後の場面である。用例④1と同じく前件で積極的な性格・言動が述べられるものの、後件では、その後適切な物言いができないと展開する。用例④1同様、「～ニモカワラズ」に改めても不自然ではない。

〔Q〕^ば 馬鹿が^か借^{しやく}金^{きん}取りに^い云^いふ^{いつ}一寸^{すん}のがれのやう、^で出^あま^あかせの^い當^いて^まなしを^い云^いひ^まくり^ましましたが、^あさて^あ跡^{あと}の^あ手^{しゆ}段^{だん}が^{むね}胸につかへました。 都・第20 【金港堂版・同一表現】

(19) 「～マシタガ、シカシ～」以外に「～マセンガ、シカシ～」などを含む、「敬体+ガ、シカシ～」の用例は、まとまりごとに次の如くである。

◇都の花（全11例）；第1=3、第4=1、第5=2、第8=1、第9=1、第14=1、第19=1、第20=1

◇金港堂（全1例）；第14=1

「～モノヽ」は全数調査を行った。うち「～モノヽ、シカシ～」の用例は、まとまりごとに次の如くである。

◇都の花（全12例）；第1=1、第4=2、第10=2、第13=2、第14=1、第17=2、第18=1、第21=1

◇金港堂（全20例）；第1=4、第4=3、第5=1、第9=1、第10=2、第13=2、

第 14=1、第 17=2、第 18=1、第 19=1、第 20=1、第 21=1

「敬体+ガ、シカシ〜」「〜モノヽ、シカシ〜」は、両版とも B 類の範囲である後半・第 22～38 に一切見られず、徹底する。

なお、梅林（2015）（2016）によると、「〜ガ、シカシ〜」「〜モノヽ、シカシ〜」とも明治期以降の新しい言い方である。特に後者は、上記の如く金港堂版にかなりの用例が見られるものの、「〜ケレドモ、シカシ〜」ともに「『浮雲』以外ではほとんど用いられておらず、『多情多恨』で 2 例見られるのみ」の「新奇な形式であった」（梅林（2015）326 頁）と言われる。

このことを物語るように国立国語研究所（2022）『日本語歴史コーパス』<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>（2022 年 9 月 7 日確認・中納言 2.6.1・データバージョン 2022.03）《明治・大正編Ⅳ 近代小説・21 編：浮雲・1887 年～伊豆の踊子 1926 年》につき、検索ツール「中納言」を用いて調査したところ（キー＝語彙素読み「モノ」+後方共起 1・キーから 1 語・語彙素読み「ノ」+後方共起 2・キーから 3 語以内・語彙素読み「シカシ」）、コア・非コアとも「腕くらべ」の 1 例である（cf. 語彙素読み「ガ」+3 語以内・語彙素読み「シカシ」：コア 14 例、非コア 36 例）。

このことから「〜モノヽ、シカシ〜」は一般性を欠く構文であることが知られる。美妙はこの実態を承知した上で、都の花版で「〜マシタガ、シカシ〜」は第 1～21 に留め、金港堂版での改稿の際、この範囲では「〜モノヽ、シカシ〜」に置き換えながら、第 22 以降は、「〜マシタガ、シカシ〜」も併せ、これらの構文を一切使用していない。

これらの構文に限らず、他の「近代小説としての新しさを持っていた」「斬新な表現形式」（梅林（2016）61 頁）についても同様の内部差が存しないか、検討する必要がある。

なお、これらの表現とは反対に、当時の話し言葉と距離のある、修辭的な用法である「中止法・反復前件」は、下記の如く都の花版・金港堂版とも第 22～38 に集中する。

◇都の花（全 13 例）：第 6=1、第 17=1、第 20=1、第 24=2、第 26=3、第 27=2、第 28=1、第 31=2

◇金港堂（全 11 例）：第 6=1、第 17=1、第 20=1、第 24=2、第 26=3、第 27=1、第 28=1、第 31=1

(20) 都の花版の文中敬体（全 161 例）の三敬体ごとの用法（31 章 [1] 項）が金港堂版の文中敬体（全 95 例）としてどのように対応するかは、次の如くである（なお、（ ）内は外数で、金港堂版で文末化した 8 例）。

- 【1】 マス系 = 128 例 → 72 (5)
- 【11】 ル形 = 13 → 2
- * ~マセンガ = 7 → 0
- ・ ~マセン (言い切り) = 4 → 1
- * ~マスガ = 1 → 0
- ・ ~マスカラ = 1 → 1
- 【12】 タ形 = 114 → 69 (5)
- ・ ~マシタガ = 61 → 30
- ・ ~マシタ (言い切り) = 52 → 39 (5)
- * ~マシタカラ = 1 → 0
- 【13】 その他 = 1 → 1
- ・ ~マシヤウ (言い切り) = 1 → 1
- 【2】 デス系 = 21 例 → 14 (3)
- 【21】 ル形 = 2 → 0
- * ~デス (言い切り) = 2 → 0
- 【22】 タ形 = 18 → 14 (3)
- ・ ~デシタ (言い切り) = 15 → 11 (3)
- ・ ~デシタガ = 3 → 3
- 【23】 その他 = 1 → 0
- * ~デシヤウ (言い切り) = 1 → 0
- 【3】 マセンデシタ系 = 12 例 → 8
- ・ ~マセンデシタ (言い切り) = 9 → 6
- ・ ~マセンデシタガ = 3 → 2

冒頭「*」印は、金港堂版で見られなくなった用法で、14 種中 5 種存する。

なお、終止形「デス (言い切り)」2 例は、用例 19・20 の如く金港堂版で削除される。しかし、用例 A で示したように都の花版「此類で、すなはち〜」が金港堂版「此類です、すなはち〜」と改められる。このため、金港堂版に文中敬体として終止形「デス」が存在しない訳ではない。ただ、それだけに第 29 の用例 A b が高一層特異な例となる。

【最終稿 2022 年 9 月 20 日】